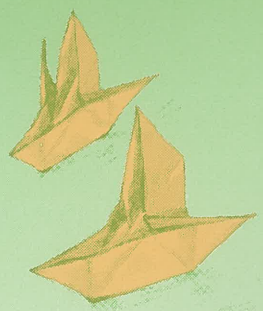
私の戦争体験

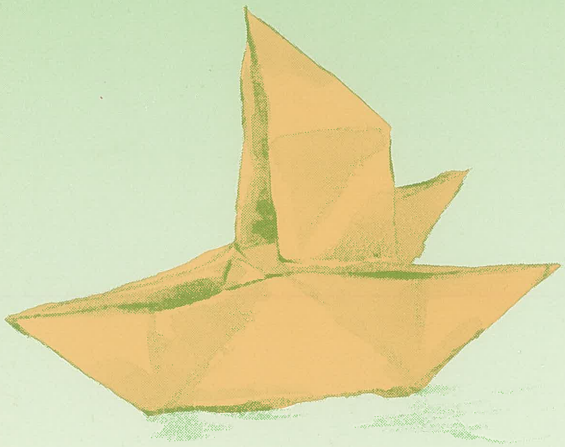
第6集

特集号 1984年6月

いずみ

大阪いずみ市民生活協同組合
羽曳野市野68－1 ☎0729（39）1000
●発行責任者・川島利雄 ●編集・機関紙委員会





こどもの明るい未来のために語り継ぎます

父は戦死した

新金岡支部
田渕　礼子

父の想い出はいっぱいある。四歳位の私をダンスホールにつれていって、私を抱いて音楽にあわせて踊ってくれた父、パチンコにつれていってくれた父、私のために詩を書いてくれた父…。私が八歳の時に逝ってしまったが、いやそれだからこそ、一つひとつを鮮明に覚えているのかもしれない。だが、決して良い思い出ばかりではない。お酒に溺れ、母を苦しめている父の姿も忘れることはできない。しかし、これは、昭和十九年に軍医としてボルネオに出征して、二十一年に復員するまでの体験がその後の父に大きな影を残していることは確かである。戦地でかかったマラリアの後遺症は、家族をも巻きこんでいったのです。

私が生まれ、弟が生まれ、医師として、やっと仕事が軌道にのり、家族四人の平穏な生活が目の前にありながら、昭和三十年、父は一人で逝ってしまった。妻と二人の子を残して…。戦争が終わってわずか十年である。その間、本業のかたわら地方新聞に随筆を載せたり、同人誌を出したり、精一杯やりたいことをやった父である。

しかし、マラリアの後遺症との戦い、また、〝戦争〟という病原菌による心のやまい(私の勝手な見方かもしれないが…)の両方に終始苦しみ、悩み、それに敗けてしまった父でもある。

今、こうして父のことを書くにあたり、父の死後、文筆仲間が編集して下さった遺作集を広げてみて、改めて、〝父は戦場で死んだのではないが、戦争のために体を蝕まれ、死に追いやられたのだ〟という思いを強くしている。戦争は、私の最も憎む敵である。

父への思慕をこめ、遺作集の中から一つ載せさせていただきたい。たぶん、父は天国でこういっているでしょう。『礼子よ、死んでからも恥をかかせるなよ。でも、平和の大切さがわかる人間になってくれてありがとう』と。

寒い夜

全く寒い夜である。脊中にはドテラを着込み、膝は毛布を二重にして巻きつけ、両手で火鉢をかかへる様にしていてさへ、一寸動いても骨の髄まで、ジーンと寒さが刺し込んで来る。窓の外では吹雪がさらさらとガラスに打ちつける音より何の音もない寂かな深い夜である。

机の上の本を急いで無意味にパタリと開いた。と、その間から今は亡き戦友鈴木の写真が現われて来た。口をへの字に曲げ、両手を腰にして天の一角をにらんで居る誠に彼らしい写真である。或時、

「おい鈴木、貴様の眉毛と眉毛の間は一里程あるぞ」

と彼をひやかすと

「馬鹿云え」とこんどはよけいひろげて

「これなら二里あるじゃろう」

と力みかえると言う誠に利かぬ気の奴だった。

私が昭和十九年南方に軍医として赴任の途中の輸送船の中で偶然彼に会った時、小学校、中学校を共にして来た私に対して「軍医ドノ」と呼びかけるのが彼には何かテレ臭かったのであろうか、或は彼の負けぬ気の性格がそうさせたのか

私からなるべく眼のとどかぬ所に居る様にし、任地に於てマラリヤになった時も仲々「診てくれ」と言って来なかった。

「おい」と言ってやって来れば「何じゃい」と返事して相共に昔を語り将来を話すにやぶさかでないつもりで居たのに、彼はそう言った点では奇妙に遠慮するので、私も内心幾分不満であった。

敗戦の色が濃くなった頃、我部隊も敵の上陸近しと患者収容所をジャングル近い奥地に設立した、部隊の中で只の一人もマラリヤを経験しない者もないと言う悪疫の地に立てられた患者収容所のことである。医務室勤務の者以外は殆んど歩行不能の重態患者ばかりがイナを並べた様に苦力小屋に寝かされてあった。

或る日

「おい、いや軍医殿」と云って医務室にあわてて飛び込んで来た兵隊がある。よく見れば顔色蒼白で不精髭こそはやしているがまぎれもない鈴木伍長である。

「おゝ鈴木じゃないか、どうしたんじゃ」とせき込んで聞くと原隊で彼のとなりに寝ていた彼の班の兵隊が私の居る収容所に入院し、昨日死に、それを班内のどうやら歩ける程度の戦友と埋めに行ったが

手くびが斬れぬと云うのだ、「手くびを斬る」のは、枯木をあつめて全身を焼くに足る元気の兵隊がない為戦病死者の「手くびを斬って」、死体はそのまゝジャングル内に放置し、「手くび」だけを持ち帰って焼いて遺骨箱に納める習しとなっていたのである。

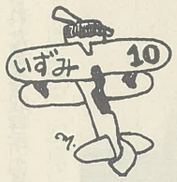
「斬れぬ、何んと、何としても斬れません」と鈴木は大つぶの涙を右肘でぬぐいながら私に訴えるのである。私はすぐ様衛生兵をともなって現場に行き、小さなメスで何なく「手くび」を切断した。後で聞いて見ると鈴木は、まるで狂人の様になって鍬でその戦友の手くびの所をめった斬りにしたと云う。鈴木とその戦病死者とは、班内でも特別に仲がよかった由、「死」と云うものに怒り悲しみ、戦争への反抗する心が、死んだ戦友に対する彼の自暴自棄的な動作となって現われたのかも知れない。

原隊から、わざわざこの患者収容所に来て戦友の死後の始末をした彼が、原隊に帰って十日とたゝぬ内にこの患収所に入る事なく戦病死したと云う事を聞いたのは鈴木の死後間もなくの事であった。彼は私を取り残して、私を無視して死んだのであった。原地人が、死んだ者の魂はすべてあそこへ行くと云った、キナバル山の麓で彼鈴木の霊もしずかに眠って

いる事であろう。そこ迄考えた時、私はその写真に向って「鈴木」と呼んだ、そうしてもう一度

「鈴木！」と呼びかけた時、ゾクとばかりに一斉に寒さが私の身体を襲って来た。

火の雨が降りかゝる中を



羽曳ヶ丘支部
成富能冨子

今も鮮明に憶えています。三十九年前の恐ろしかった一夜を。

昭和二十年三月十三日、私は当時八歳で、ところは大阪市浪速区元町一丁目で生まれ、居住しておりました。

玄関を入った土間には、割に大きな堅固な防空壕が掘ってあり父の自慢のものでした。風邪をこじらせた母と幼い弟妹は母の実家に疎開しており、私は学校があるということで、祖母と父の三人でした。次第に戦争が悪化している様子なので、私達も疎開をと思っていた矢先でした。

ひとねむりした後、空襲警報のサイレンで飛び起き、「また!!」と思い服に着換え預っていた隣の男の子も一しょに壕の中へ入り警報解除を待っていました。父はすでに、町会消火隊として戸外で活躍しておりましたが、しかし、この夜はいつもと違い父が祖母に大事な物は身につける様に伝えて来ました。B29の爆撃機が十一時頃から襲来して焼夷弾を無差別に大量に落としていったのです。ものすごい音なので、祖母が時々戸外の様子を見たり情報を聞いたりしていましたが、その間も不安と恐ろしさでふるえていました。その内この家も危いので広い所へという祖母の判断で移動しました。私の町大阪はあちこちが火の海でびっくり仰天でした。

市電通りの歩道に掘ってある防空壕へ入りましたが爆発のものすごい音、固くなって耳をおおい、がたがたふるえて生きた心地はしませんでした。その時祖母は、ここも危いから兎に角新川の賑橋を渡っておかないと橋が落ちるかもしれないから逃げようといい、皆の「危い!!やめなさい」という声を振り切り、上六・方面が暗かったので走り続けました。

まわりは、火の海。火の雨が降りかかってくるのです。私は祖母の手を、隣の男の子は私の手をしっかり握り、防空ズキンをかぶり「おばあちゃん熱い熱い」を泣き乍ら連発していると、祖母は「もう少しの辛棒やで！おばあちゃんの手を放したらあかんよ」と言い乍ら小走りで逃げました。

父はどうしているやら？家は？大事な服や人形はどうなっているかなあ？？？延焼を防ぐための強制とりこわしの疎開用空地がナンバ附近にありました。父が私たちを探しているということを逃げている最中近所の人に会い、聞いたので空地に戻り、父や隣組の何人かの方と再会することが出来ました。そこには、色々な物が散乱し、フトンが山の様に積まれていましたので、疲れと安心で朝方まで路傍のフトンの中にもぐり眠ってしまったらしいのです。

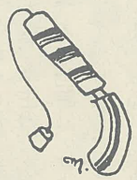
父が夜明け前に家の焼け跡へ見に戻ると、金庫だけポツンと残っていて附近はブスブスと煙が上がり、防空壕の中に残った方達はむし焼きで、また逃げ遅れた人も沢山死んでおられて悲惨なものであったようです。

年月がたつにつれ、祖母の判断が正しかった事に感謝しています。

地下鉄だけが、運行していたので、天王寺まで乗り、桑津町の親戚をたよりに真っ黒な顔をして、雨の中をトボトボと足をひきづって歩きました。二日程ショックでボンヤリしていたようです。また今夜もB29が飛んでくるかなあ、どうしよう！と心配ばかりしていた当時のことが昨日のように思い出されます。

こども心に、戦争の恐ろしさを受けた衝撃は終生忘れられません。

狂信性と自信過剰が敗戦に



岡島美佐子
（藤井寺南支部・岡島美子さんのおかあさま）

この濃尾平野にも、ようやく太平洋戦争の敗色はこくなっている。毎日のように、軍靴を響かせてたって征く。道幅いっぱいのその列の上に、五月の陽が眩しい。従兄達が、上司が、そして兄が征く。そのうしろ姿を追いかけては必死に武運を祈る。「もう一度、召集が来たら、もう日本は駄目ですよ」つねづね、洩らしていたTさんまでも。右手の義眼が鈍く光っている。

挺身隊の名のもとに、県庁、市役所、師団指令部、食料営団、それに税務署、五人ひと組に分けられた勤めにも大分慣れた。

この頃になると、職場では、重要書類の疎開のことなども取沙汰されるようになっていた。もうどこの職場でも、はじめられているらしい。川むこうの町外れの民家の土蔵をお借りすることとなり、各課リヤカーと、大八車一台の分量までと定められた。俄に忙しくなった。そんな昼まえ、中年夫婦が呼び出されて来た。密造酒、いわゆる〝どぶろく〟の密造を摘発されたのだ。「いつから始めた？」「つい最近です……」「つくったら罰せられる事も知ってても？」暫らく説教され、平身低頭、誓約書につめ印を押されて帰ってゆく。週に一、二度こんな光景を見せられる。没収された〝どぶろく〟は一日、芳じゅん？に匂っている。壷の口へ顔を近づけると、くらくらと、目まいする甘さである。

三日後に運び出す重要書類は、山と積まれている。

久しぶりに、本屋を覗きたくなっていた。

何んとなく蒸し暑い夕暮れ、いきなり空襲警報が出た。サイレンの鳴り止まぬ空に、ばしばしと火花が散り、火柱が立つ。何時飛来したのか、B29八機ほどの

列に、あたふたとむかえ打つ一機、瞬間黄の閃光が走った。と、見る間にもんどり打って落ちてゆく、その尾翼に紛れもない日の丸を見た。「負けた」と思った。大袈裟なようだがこの数秒に、日本の敗戦を見た思いである。飛行機が欲しい。とびたくても飛べない飛行兵たちへの無念の思いをだぶらせていた。

この日を境に毎日のように、B29の爆撃は続き、K飛行場への通路となるわが街は、家もろ共焼き尽されて了った。いち早く裏山へ逃げ、助かったものの手に何も持ってはいなかった。

何もかも焼けて了った。兄の夥しい専門書、着ることもなくしまい込んでいた水色の振袖、真っ赤な文箱、焼け跡の仏間と思うあたりの土の中から、首のちぎれた二十糎大の弘法大師像を見つけた母は、涙ぐみつつ、均らした土の上にその仏さまの首と胴を置き、手を合わせていた幾日かがあったのを覚えている。

この頃になってもまだ、心のどこかに戦勝を疑わぬ気持が残っていた。

日本を戦争にかり立て敗戦にみちびいたのは、日本人が持つ「狂信性」と、「自信過剰」だと言い切った当時の文化人の言葉が忘れられない。あの、終戦の日の灼けつくような中で聞いた蝉の声と共に。

戦争悲話

藤井寺北支部
西野登志枝

丁度私が女学校に通学している頃は、昭和十八年から大東亜戦争の激しい最中で、今では牛皮靴も皆、学生の方々がはいておられますが、その当時は、ブタ皮の規定の物で通学しておりました。そのブタ皮もなくなり、よく減るスギ下駄に赤いはな緒のついたのをはいて、通学していたのです。そして、勉強の合間には、放課後に軍に尽くして下さっておられる方の白い下着縫いと、軍服に付ける肩章付け、軍帽の金線と星付等の奉仕作業を毎日し、日曜日などは、軍のためにつくして下さる方々に送る千人針を、身を守って頂く為に致しました。

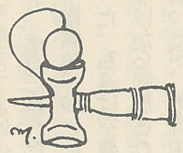
ますます戦争の激しさが増し、卒業しても、女子としての習い事さえ出来ぬ世の中となり、軍への奉仕として男子は軍需工場へ、女子は挺身隊へ行かねばなりません。私は、輸送船とか車輌を作る会社の経理に勤務し、重要書類を扱っている者だけが別に避難場所で仕事をしておりました。ところがブンブンと音高くB29、グラマンとかが、ひっきりなしに頭上に飛んで来て爆弾を落下させ、私達はにげる余裕さえなく、草原に身を伏せてひくくなり難をのがれた事が度々あったのです。それはそれは、死ぬか生きるかの一日一日でした。いつ敵機が来襲するか分かりません。モンペ姿で着のみ着のまま防空壕へ入り、夜もろくろく寝る事さえ出来ず、仮寝のままの日ばかりでした。食物と申しますと、当時、玄米をいってそのままの物をどんぶりに入れて熱湯をそそぎ、当時は楠公米と言って、倍になる迄ふたをして三度の食事をした事もあり、大豆やとうもろこしの御飯もいただいた事でした。空襲空襲で食事もろくにのどへ通りません。空からはどんどん爆弾投下で、あたりは火の海の連続でした。

私は難をのがれましたが、友も多々なくなり、防空ごうの中で真っ裸のままで正座して死亡していた者、爆風で川の中にとんだ者、手・足と切々になってとんでいる者、あちこちに死体の山で、その上を通って会社に通勤するにも電車はなく、線路つたいに朝早く出て通ったものです。若さざかりの娘時代もクリーム一つぬらず、唯々一日一日を無事に生きながらえればの一念でした。衣料といえば、衣料切符の割り当でしか買えません。買出しにもリュックを背おって、上にごまかす物をのせて、百姓している所に一日がかりで行ったものでした。せっかく買出しに出かけても、憲兵にはつかまるし、二十歳位の年頃でさえも、恥かしいどころではありません。家族の者が協力し合って食べるのが精一杯でした。

あたりは死体の山で、整理のつけ様もない位の道でした。今思えば、よくその日その日が暮らせたものだと思っております。広島・長崎では私達以上に、原爆の恐ろしさを体験され、たくさんの方々が亡くなられました。私どもは、まだ難をのがれられただけでも、今は幸せと思うのみでございます。「若き時代」もなかったものです。未来をになう現代っ子、そして今の若き世の皆様方にはあの様な恐ろしさは到底分かりっこありませんでしょう。まるで夢の様な話だとお思いでしょうが、もう私達だけで十分です。二度と繰り返さぬ様、祈るのみで御座居ます。今は物資も豊富にあり、あの時を思えばどの様な苦労にだってたえ忍んで来られますもの。世の中も変ったものだと唯々感謝にたえません。どうか、世の皆様方、戦争の悲劇の文面だけは、まだまだ書き表わす事が一杯ありますが、当時の有り様、あの恐ろしさ、私の下手な文面の一こまではありますが、限りなく、こうして記していても、思い出せば〝戦争〟という言葉にさえ身振るいがして参ります。

文面の終りでは御座居ますが、この悲劇の戦争でなくなられたたくさんの方々の御冥福を、皆様方と共に御祈りしてやみません。

十五年戦争の怒りを忘れず



向ヶ丘支部
吉田　浩久

昭和十六年十二月、大東亜戦争に突入。真珠湾攻撃、シンガポール陥落、マニラ陥落……。徐々に物質が乏しくなり、ズボンや靴下につぎを当て下駄の歯がちびると裸足。十九年はミノルタカメラに連日動員され望遠鏡や飛行機の照準器のレンズを研磨する仕事に従事した。米不足の為ひもじい思いで、真っ赤なベンガラをつけ研磨後の点検でエーテルを吸いす

ぎて失神した。そして「ほしがりません、勝つまでは」を叫んだものでした。

二十年三月現府立大学農学部に入学、陸軍獣医幹部候補依託生を志願、戦局はますます悪化し、堺も空襲を受け、その都度「いまにみていろ神風が吹いて全滅するから」と非科学的なことを信じていた。堺は五回にわたって空襲をうけたが、中でも七月九日夜半からの第四次空襲が大被害であった。B29は突如大阪湾上から堺市南西に侵入し、東北に向かって斜めに風の様に通過しながら焼い弾の雨を降らせた。一瞬にして大浜、龍神、宿院、堺東一帯は猛火に包まれ、油脂黄リン性の焼い弾の威力をみせつけられた。兄と屋根で監視していたところ、旧市内爆撃の流れ弾が二階のひさしを突き破り、どかんと落ちて来た時はもうだめだと思った。払っても払っても、黄リンの火はあちこちにペタペタくっついて、消火に手間取り、隣家は完全に焼け落ちてぼう然となったことが今も忘れられない。町内の人々の協力で、百舌鳥梅北町が四〜五軒焼けただけで済んだことは不幸中の幸いであった。

学校が気がかりで疲れた体をひきずって途中までいったが、あまりにも無残な状態の被災者、被災地を見てとんで帰ってしまった。それでもラジオや新聞で聖戦は必ず勝つと国民の士気高揚につとめた。翌日学校へ行くと、本館は残っていたが病院、畜舎、寮等は全て焼け落ち、黒こげになった飼育・実験動物があちこちに見られ、つい先日までほほをすりよせ可愛がった動物達とのことが思い出され、胸がしめつけられた。

八月十五日、仁徳御陵での草刈りを終え、農学部玄関前で正午の玉音を聞いた。敗戦の瞬間、私は助かった、生きれると思った。しかし敗戦の惜やしさで涙がとまらず、明日からどう生きてよいのか、何を信じてよいのか、途方に暮れた。

満州事変から太平洋戦争、ついに十五年戦争は敗戦で終った。私達は空襲の恐怖や軍からのしめつけから解放され、夜の街に明るい燈は戻ったが、戦時中以上に飢えが厳しく、食べ盛りの私は母親をよく困らせた。

さて三十九年前の敗戦時、おおかたの人が信じられなかったように、私もラジオ放送くらいでは敗戦を疑った。それほど軍の統制が厳しく、軍国主義教育が徹底していた。しかし上陸して来た米軍の想像以上の機動力、手際のよい武装解除と治安対策を見聞し、次々と明らかにされた戦時下の日本支配層の国民だましと弾圧の手口を知らされた時、敗けた屈辱よりも日本の権力者への憎悪に我慢が出来なかった。一億国民に戦争への死の行進を命令したのは一体だれなのか、苦い体験を持つ私はせめて学友や、飼育・実験動物の死をむだにしないためにも、真実と真理を守って平和世界のために努力したいと思っている。

毎年敗戦記念日には、農学部玄関前にと足を向ける。あの十五年間の戦争の怒りを忘れない為に、教え子を再び戦場に送らないためにも、からだの続く限り八月十五日には出むきたいと思っている。

しかし今また、軍国主義的風潮をかもすような政治の動きを、国の内外からひしひしと感じる。今こそ、私たちは、三九年前の敗戦の日に味わった、戦争から解放された喜こびと、戦争が人類にとってどんなに悲しいものであるかを、再度確かめるべきだと思う。現代は、国民が一切の自主性を否定された旧憲法の時代ではなく、素晴らしい新憲法をもつ時代である。国民は常に政治の動向を注視し、再び国の進路を誤らせぬ心構えと、すすんでそのための世論を呼びおこす気力を、一人ひとりが持たねばならないと思う。

戦争の悲惨さを子供達へ

加納支部
八尾佳代子

テレビで戦闘マンガが、多く放映されています。子供達がそれをまねて戦争ごっこをしています。でも戦争なんて、そんな格好のいいものじゃない。どんなに惨いものなのか母親として話して聞かせることが大切だと思います。私自身戦争は知らない一人ですが、父母や祖母などからさまざまな体験を聞いています。

たとえば、母の小学生の頃、大変慕っていた先生をある日突然憲兵が教室に入って来て連れて行ってしまい、それきり先生は戻ってこなかったと言うのです。その時は、子供だし悲しくて何が何だかわからなかったけれど、今考えると先生は、反戦論者だったのだろうと話していました。この事は、子供心にとても強いショックだったことでしょう。

当時は、どんな立派な人でも反戦論者と言うだけで、犯罪者扱いされたのです。自由に戦争反対を叫ぶことさえできなかったのです。

また、姑は、子供（今の私の夫です）を背中に背おって堺大空襲の中を命からがら逃げ回ったと言うことです。幼子をかかえて、どんなに恐ろしかったことでしょう。命があったことが不思議なほどです。

その頃、頼る夫は戦争で兵隊にとられ、婚家は疎開で集まった親戚であふれ、食べる物もなく、みじめな気持で実家に戻って大空襲に巻き込まれたのです。多くの人が死に、あたりは焼け野原になり、死体がゴロゴロと道端にころがっているのに、それがマネキンでもころがっているように怖くもなんともない、ただ呆然と立ちつくすだけだったと言います。明日への希望ももてず空しい心で子供を背おって放心状態で立ちつくす、その気持は、戦争を知らない私などには、想像もできないほどです。

他にも、もっと悲惨な話を多く聞きましたが、戦争の時は、世の中がすべて狂ってしまうのだと思います。たとえどんな理由があるにせよ、人が人を殺す、国

が国を滅ぼす戦争は絶対反対です。
父母や祖母達の世代の犠牲で今世の中は一応平和だけれど私達の世代は、これから先も戦争が起らないようにしていかなくてはなりません。その一つとして私は、もっとも身近な自分の子供達から、戦争の悲惨さを伝え話すことにしようと思っています。

軍備より暮らしにお金を

徳島　高子
（八尾大子堂支部・徳島栄子さんのおかあさま）

今、まるでゲームの様に地球のあちこちの国で争いやテロ事件等が起きていて、大層不安な状態の中にある。
私達は昭和二十一年の春、上海から引揚げて来た。上海でも虹口（ホンキュウ）地区（日本人の集結地区）に空襲があり、日本人小学校や病院の庭へ爆弾が投下され、その都度防空壕へ避難した。屋外はいろいろと理由があって危険なので、家の階下に穴を掘って主人が一人で防空壕を作ったのである。私は子供に大きな鈴を付けて、何処に遊んでいても所在を確認出来る様にしておいた。
終戦の数日前、会社（共同租界にある日中合弁会社）へ出勤した主人から「今すぐ食糧を買い込む様に」と電話があったので、早速いつもの店に行って見ると、野菜等は一ぺんに高くなっていて、中には売らないと言う店もあった。夜、主人から「もしもの時には、お前と子供を殺して自分も死ぬからそのつもりで……」と話された時、私は従う覚悟をしていた。
終戦の日から現地の日本の兵隊達が決戦をするという噂が流れて落付かない日々だった。毎日空を覆うばかりにアメリカの飛行機が飛んでいた。一人で歩いていて時計やお金の強奪に会ったり、追っかけられたりいろんなこわい目に会った人の話も聞いた。家へも誰が何を告げ口したのか、中国の兵隊達が五、六人靴のまま上がって来て、家宅捜査をして行った。最後に入って来た海兵が、おびえている私に「奥さん、疑われる様な事しないで」と、きれいな日本語で小さな声で言ってくれた。ほっとした。
いろいろな目にあったが、今思えば中国の人達に横暴な仕打ちをしてきた日本・の兵隊さんへの報いを、私達が受けていたのだと思ったりする。合弁会社に勤めていたお蔭で、暫くはお米や日用品を届けてもらっていたが、だんだんと持物を売ってお金に替えていた。
そのうち奥地から引揚げて来た邦人達が、私達の家へ物乞いに来る様になった。とても見すぼらしくて気の毒だったが、同情するより悲しくて仕方なかった。その人達は日本人小学校へ集結して、順次乗船し日本へ帰るのだが、全んど荷物はない様だった。
引揚げる日、私は二歳の子供を負い、七ヵ月の妊婦だった。夜中に集合して夜明け前に大きなトラックに、女子供だけぎっしり積込まれ立ったままで、明方の道をフルスピードで呉淞へ走った。トラックに乗る時、主人が使役の為残るからと言うので別れ別れになった。もう会えなくなるのではと、とても心細かった。でも夜中の行動は皆静かで気が張っていた。乗船してやっと主人に会えたものの、船底に茣蓙が敷いてあって、座ったらそのまま動けない位満員だった。やれやれという思いがしたけれど、私達が乗船した前の船は、上海を出てから機雷に当って沈んで終っているので、とても恐ろしかった。船は病人とお年寄りが殊んどで、私は船酔いがひどくて博多へ着くまで四日間は何も食べられず、寝た切りで動けなくなった。船中で妊婦の早産で水葬が行われたという噂も耳に入っていた。
博多への上陸第一歩は、DDTの白い粉の洗礼を全身に受けた。発しんチフスという病名も初めて聞いた。藁の入った黒い固いパンと、お金千円の配布があった。
門司の地下道で夕方から翌朝まで並んで列車を待ったが、各地からの引揚者で通路は一ぱいになった。やっと乗った列車は身動きも出来ず、お手洗いに行くにも通路の荷物の上を這う様にしてたどりつけば、便所にも人がつまっている有様。各停の列車がやっと大阪駅へ着いたのは、午後十一時すぎだった。地下鉄の窓ガラスは破れて板が打ちつけてあるし、電灯は暗く、乗客はよれよれの国民服ですすけた顔をしている。私は想像以上に荒れ果てた有様に驚くばかりだった。
私の実家は焼け残っているはずと思いつめていたが、やはり不安だった。知らない人に小銭をいただいて終電車で平野駅に着いた。終点からは誰も歩いていない夜中の道を、黙々とひたすらに歩いた。時折ジープが走り抜けて行った。
やっとの事で家の灯が見えた時、安心と嬉しさで足が動かなくなった。道端にしゃがんでしまったが、はげまされて家に着いたとたん、へなへなと倒れこんでしまった。家中の者が起きて来て背中の子供を取ってくれたり、水だ、ご飯だ、と大さわぎになった。私は声をあげて泣いてしまった。

毎日毎日、ラジオで引揚者の時間を聞いて、帰りを待っていたのだという両親は、私達が帰って来たので大家族になった為に、配食では足りないし、いろいろと大変な苦心だった。
やがて主人も家族のため仕事を探したり、家を見付けたりいろいろと頑張ったが、一年目に過労と病気のため突然他界してしまった。健康を何より誇りにしていただけに、とても可愛想だった。戦地へ行き、なまじ下士官だった理由で、会社から帰ると、地域の日本人に軍事教練の指導を命ぜられ、隣保の役員で忙しく働き、無理をしていた様だった。日頃の元気を過信していた私にも油断があった事を後悔しているが、やはり戦争の犠牲であった様な気がしてならない。
今は平和な時代で、戦争の事を知らない人、恐ろしさを知らない人が多くなってきた。
戦争に行った人は、心の中に戦争の残酷さ、恐ろしさ、悲しさを口に出して話せない位、沢山の体験をしていると思う。戦争はもう絶対にしてはいけないという事を、若い人達と一緒に真剣に考えて欲しい。
たとえどこの国の人であろうと皆同じ事だと思う。世界中が戦争や戦備に使うお金で、飢餓に苦しんでいるアフリカの人、孤児や難民を助けて上げられるし、福祉のために役立つ事も考えられると思う。

おそかった春

小島　菫
（大野芝支部・広瀬純子さんのおかあさま）

終戦の二日前、応召されて父が承徳へ出征しました。数え年四十二歳の父が私と弟に何の言葉もかけられず、また私も弟も何とも涙が先に立ち、つらい別れでした。終戦の日より十日ぐらいたったころ、私たちの開拓団も何だか気が落ちつかなく、何だか重苦しい空気がただよって来ました。

ある朝、副団長さんから皆に分配するお金の計算をするようにとのことで、私が仕事に取り付いた時、前の開拓団のひとりが「近所の藤原さんがやられた。うちのとうちゃんも殺された」と大声で泣きながら私たちのところへ逃げてきました。「それは大変」と言っているうちに銃声が聞こえてきます。今まで静かだった村も一変してしまいました。満人の男の人たちが略奪に来たのです。私たちは本部に押し込まれてふるえておりました。時々、銃声の音が気味悪くなります。男の人たちは、皆の家の衣類や金になるような品物を持ち去って行きます。次に婦人や老人、子どもが残り物を全部取ってしまい、私たちは途方にくれてしまいました。

「ここにいては殺される。錦州の町に逃げなければいけない」とのことで、夜になるまで高粱畑（コウリャン）の中を、老人を負う人、子どもを連れて逃げる人、一同気でも狂ったように逃げました。近所の奥さんが出産して七日目の赤ちゃんを連れ、七歳、五歳、三歳の手を引いて逃げるのを見て、気の毒でたまらず、赤ちゃんを預かりおんぶしてあげたのです。奥さんは拝むように私に頭を下げるのです。私も奥さんたちのそばにいないと心配すると思い、いっしょに行動しました。「子どもは泣かすな。気づかれると殺される」との声に、子どもたちもわかったように赤ちゃんに至るまで一声も出しません。「今夜は町まで逃げる」との命令で、夜になり人通りが静かになるのを待ちかまえ、二列に並んで歩くことになり、お気の毒だったが赤ちゃんはお返ししました。

町に近い橋にさしかかった時、自動小銃の音がして来ました。一同息を呑みました。「ああ、ここで死んではいやだ」と口ぐちに聞こえるような聞こえないような声で皆がつぶやきました。心臓の鼓動は高まり、今にも殺されるのではないかと恐ろしくなってしまいました。ようやく銃の音が止みました。その間になだれるように橋を渡りました。背よりも高い

高粱畑を長い間通り、一同疲れの色が見えて来ました。小児マヒの二十歳の娘さんをおぶったおとうさんは、娘さんを高粱畑に降ろして、「明日迎えに来るからここを一歩も動かないように」と置いてしまいました。皆が後ろをふり向きながら逃げて行きます。十二㌔の道もなかなか遠かったように思いました。

町についた時、「誰か」と銃を持った人に声をかけられました。また「殺されるんじゃあ」と思ったとたん、日本の憲兵隊だったんです。「あんたたちもここまで逃げて来たんですか。こちらへ入りなさい」と言ってくれた時には安堵の胸をなで降ろしました。でも、憲兵隊の人たちも今では敗戦の身、「何かあったらこの手留弾で死にましょう」と言われ、また恐ろしくなりました。

一夜泊めてもらい、あくる日、錦州の避難民が集結している学校にたどりつきました。朝、湯呑みに高粱のオカユが一杯、昼はなし、夜はおにぎりが配給されました。お金も無く、着る物もなく、動けばお腹がすくので皆寝ておりました。でも時々、ソ連の兵隊が娘を出せと言ってきます。私たち女の子は便所で頭を防主に刈って貰いました。軍隊の残し物の軍服を着、胸にはサラシを巻き、帽子をかぶり、耳にはタバコをはさみ、男の格好をし、外マタに歩いて男になりきりました。いろいろのニュースが入ります。ソ連兵に親の前で強姦され、舌をかみ切って死んだとのニュースはたびたびありました。私も二十歳、日本に帰るまでは無事でといつも神に手を合わせました。

学校に来て半年もすると、広い運動場が子どもたちの墓場に変わりました。「次はどこの子どもが」とささやかれたことでした。奥地からは毎日のように避難民が来ます。まるで皆ルンペンのようです。治安の悪い奥地から逃げる時には、子どもを我が手で殺さなければいけないような状態だったと聞きました。そんな時、少しでも生かしたい気持ちで中国人に預けたことと思います。私たちのいた錦州は治安がこれでもよい方でした。

私たち娘は学校にいてもあぶないので林さんという元軍人の家にお世話になりました。が、ソ連の兵隊に娘がいることがわかり、「娘を出せ」と林さんと格闘になり、林さんはピストルで撃たれ、けがをしました。私たちはお気の毒でたまりませんでした。また、ボロ買いがまわって来ましたが、ボロが目的ではなく、娘のいる所をソ連兵に売り込みます。私たちは何回となく便所の中に入り、外から釘づけにたびたびして貰いました。娘って何て苦労しなければとなさけなくなりました。

いろいろと苦労をしながらも少し落ちついてきましたので、周囲の空家にうつることになりました。せまい家に七所帯入りましたが、文句をいう人はひとりもいませんでした。そのころ、父の知人から父の病死のくわしい手紙を貰い、驚きました。夕ぐれ時、あのやさしかった父の面影を思い浮かべ、終戦二日前に出征したことを考えると何とも言えない気持ちです。塵箱にもたれて弟と思う存分泣きました。

いつまで泣いても仕方ありません。明日もまた使役が待っています。私は皆と東北公営設営隊という中国の軍隊にガラス拭きに行きました。そこでは若かった私と杉本さんに毎日来てほしいとのことでした。何だかこわいような気持ちでしたが、行ってみると日本に留学していた人もいて、とても楽しく勤めることができました。「自分の姉や妹が日本兵に強姦され殺されたから、あなたたちにはそういうことは絶対にしない」と言われた時にはドキッとしました。日本兵もひどいことをしたものだと思います。

そのころ日本に引き揚げる話が出はじめました。嬉しさのあまり、夜も眠れないこともたびたびでした。日本はどうなっているだろうか、祖父母、母、兄はと

思うときりがなく、なつかしく、涙がとめどなく流れます。お金がある人たちは、奉天の方へ行ったら早く引き揚げられると去っていきましたが、結果的には、お金のなかった私たちの方がコロ島から先に引き揚げることになりました。お金がなくて得をしたことはこれひとつでした。

いよいよ引き揚げとなりました。「日本に帰っても、生活が苦しかったら中国においでなさい。食べるだけのことなら保障します」と、中国の人が言って下さった時には、どんなにうれしかったことか、感謝の気持ちでいっぱいでした。なんて心のやさしい方だったと、今でもなつかしく、お会いしたい気持ちでいっぱいです。

貨物列車でコロ島まで行き、日本から迎えにきてくれたのはQ082、米国の上陸用船艇でした。やっと日本に帰れる。うれしい、うれしい、うれしい。皆真剣な顔で船に乗りました。初めて日本から来た船員さんたちに会い、日本のことをくわしく聞くことができ、安心しました。甲板に出てデッキに足をかけ、男のような格好をしていると、船員さんから「ここはもう中国ではないので、男にならなくてもいいよ」と言われ、一同大笑いをしました。「今、故郷ではリンゴの歌が流行しているよ」と唄ってくれました。なにもかもなつかしい、もうすぐ日本に着く、夢のような感じです。私たちにも春が来ました。おそかった春が……。皆の顔がほころびました。今までの苦労が、いつの間にか波の音とともに遠くへ消えていきました。誰かが唄っています。「さらばコロ島よ　また来るまでは　しばし別れの涙がにじむ。恋しなつかしあの空見れば……」。皆がともに唄い続けました。第二の故郷を後にして。

命がけの大脱走

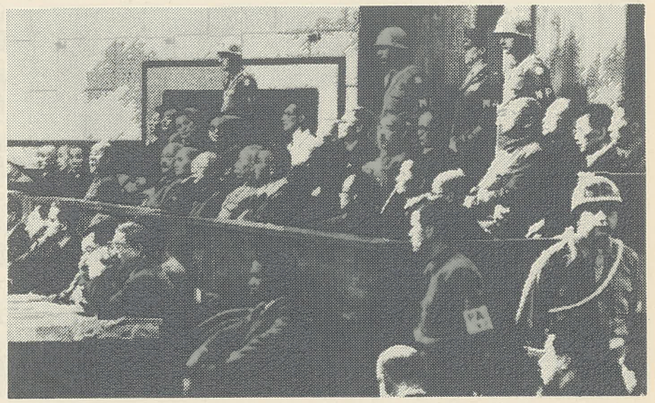
春日丘支部
増田　俊之

第二次世界大戦が始まった次の年、一九四〇年（昭和十五年）の八月、朝鮮咸鏡南道（現在の北朝鮮人民民主主義共和国）というところで私は、生まれた。

当時、朝鮮は絶対主義天皇制国家日本に支配され、その領土の一部だった。朝鮮の人は侵略者の日本人から〝チャソコロ〟と蔑視され差別された。ちょうど日本の支配者として占領米兵から〝ジャップ〟といわれたように。

いつでも、どこでも支配する側の論理が貫徹する見本だ。

父は一九三〇年、朝鮮総督府（当時）の警察官としてこの地で働き、二男二女をもうけ、次男がこの私だ。



朝鮮人支配の片棒を担いだ一人として父は、なんと終戦近くの十三年間、この地にとどまった。後で聞いた話だが、外勤巡査のホヤホヤだった彼は「朝鮮独立を目ざすML系・ソウル系などの〝思想犯〟が地下に潜り、日本の〝統治〟に抵抗するので特高警察は『治安維持法』をフルに活用し、検挙弾圧に日夜明けくれた。それにしても、検挙した犯人は六尺椅子に手足を縛られ、ヤカンで口に水を注入し、自白するまで拷問を受けた。これなどは氷山の一角で、新米の私は朝鮮人をきのどくに思い、特高勤務だけはしたくないと思うようになった」と述懐していた。

私の朝鮮での記憶はほとんどなく、空白に近いが、近くに「西本願寺」の寺があり、よく兄たちと遊んだ所で、終戦ちかく北から脱走してきた日本兵が朝鮮人保安隊に捕まり、ベルトでこっぴどくなぐられているのを覚えている。

終戦の二年前の一九四三年、多くの学生を死地に追いやることになった、あの無謀な学徒動員計画が実施され、現地で比較的客観判断ができる立場にあった父たちは、敗戦を予感し不安になって警察を退き「元山府庁書記」に変った。この転職が私たち一家を日本へ無事帰る道を開いた。

広島に原子爆弾が投下された二日後の一九四五年八月八日、ソ連軍が対日参戦して元山港に上陸、私たちは捕虜の身となった。米軍の〝本土〟占領時も同じだが、路上で婦女子を見ればソ連軍に「強姦される」というので母や姉たちは暗い一室に隠れていたという。満州など北から避難してきた女の人は顔に炭をぬり髪を短く切って男装し逃げてきた。支配者が支配される側になるとき、常に痛めつ

けられるのは弱者なのだ。

捕虜として物資の輸送などでソ連兵に酷使されていた父たちは、このままでは日本帰行は不可能と悩みぬいた末、終戦四ヵ月前、遂に仲間二〇余名による元山からの決死の大脱走を敢行した。

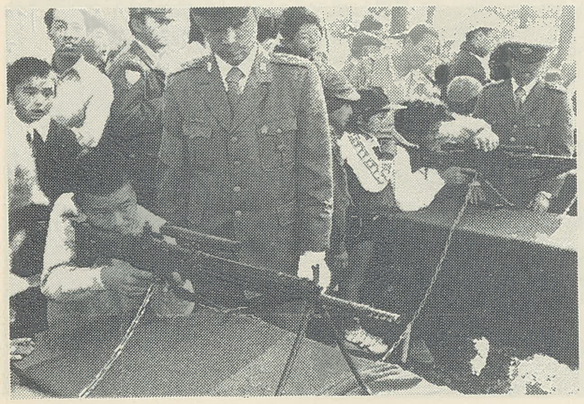
私は父のリュックの上、妹は母が背負い病弱の姉は他の男性に助けられての悲惨な逃避行が何十日も続いた。ある夜、ソ連軍の検問所で見つかり父と私は連行された。不安と焦燥の中、カタコトの通訳による長い取り調べが続き、母たちはもうダメダと観念したそうだが、私には忘れがたい光景として今も目に焼き付いている。

終戦後、引揚者の総数は六二九万、その一人として無事博多港に上陸し、故郷の宮津（京都）の祖母のところへ身をよせることができた。

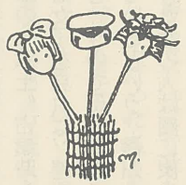
一九四一年十二月の真珠湾奇襲から一九四五年八月六日の広島への原爆投下、ポツダム宣言受諾による全面降伏、この間、軍国主義日本は中国人民一〇〇〇万人を死傷させ、百数十万以上の朝鮮の人を日本へ強制連行し、十五万人以上の朝鮮人を戦場にかりたて死傷させた。さらに、ベトナム・インドネシア・フィリピン・インド四ヵ国だけでも八六〇万人の人々を殺した。

戦後、マッカーサー元帥との取り引きで天皇は「人間宣言」を出し政治の表舞台から身をひいたが、天皇を中心にした軍部独裁者及びその流れをくむ者こそ断罪さるべき野獣たちなのだ。現在の自民党の影の実力者、岸信介はA級戦犯者だ。また中曽根首相は右翼の流れの一人である。

私自身は直接戦争の体験を持たない世代だが、「侵略者」の子孫として、これら中国・朝鮮・東南アジアの人々への償いを忘れてはいけないと自覚している。



短歌



三国支部
木村　友子

着々と基地の拡充なりゆくに戦に果てし兵の慟哭

わが兵の民衆に向けし銃先を身に刻むべし昏き歴史を

民族の悲劇ふたたびゆるされずトマホーク阻止せむ声枯るるまで

弾薬庫の堤に立てる自衛隊員の握る銃先いづ方に向く

青野ヶ原ホークミサイル基地

敗北の昏き歴史を顕たしめてトーチカ跡を夏草蔽う

原子爆弾と竹槍では

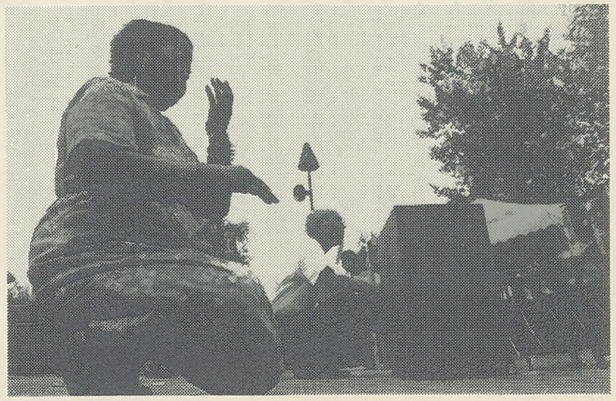
富田林支部
藤村　隆子

人が人をあやめ、あやめられる戦争、それは物質的欲望の他何者でもない。二度と得ることの出来ない尊い生命を、このようなことで失うのは、非常に悲しいことである。

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃を皮切りに、日本は、してはならなかった戦争に突入してしまった。

男子の青壮年は、兵隊検査なるものを受けさせられ、健康状態に応じて、甲、乙、丙に分けられた。私の兄は幼児期の股間節脱臼のため「乙種合格」という通知を受けている。

戦いたけなわとなるほどに、その兄にも召集令状と称する赤紙がきて、十九歳の兄は満州へ連れて行かれてしまった。赤紙を手にした母が、来るものが来た！と思ったのであろうか、ペタソと玄関に坐り込んでしまった姿は今も脳裏をはなれない。我が子を戦場へ送る母親の気持は、如何ばかりか察するに余りある。



一方「学徒出陣」の名のもと、ペンを銃に持ちかえた角帽の学生も続々と征った。残された老人、女子、子供達で国土を守らねばならない。「学徒動員」「挺身隊」「勤労奉仕」等々年齢に応じてそれぞれの分野へ入る。小学生は働きのなくなった農家へ田植、草取り、芋掘りと日の丸弁当（真中に梅干が一つ入っただけのもの）を持って勤労奉仕である。女学生は軍需工場へ、私達は「潜航艇」の部品作りに、旋盤とヤスリを使っての作業である。「H重工業株式会社」であったが、敵に気付かれぬようにと「ヤマ八〇〇六工場」と名付けていた。

年経る程に、日本国土が危くなってきた。そして敵が上陸したらこれで一突きだ！とばかり竹槍を持って、エイッ、エイッ、エーイッと訓練したものであったが、今思えば、「原子爆弾に竹槍」とはお話にならない話である。

花もつぼみの若桜、勝つたことだけを信じて私達学徒も頑張った。寮での食事はベークライトの食器に大豆かす入りの御飯、はるさめと魚の煮付、それにぬるくなった汁物だけのものであるが、空腹には待ち遠しい食事であった。自分の部屋へ帰っても食べるものといえば、「いり米」「いり豆」等、それは非常用の食糧であるから食べるわけにはいかない。着衣は着替の下着と、もんぺ（和服をくずして働き易い作業衣を作る）の上下位で夏の暑い時でも「白いものは敵機に見つかりやすい」と黒っぽいものしか着てはならなかった。日毎衣類を替えて

出かける今の若い人達には想像もつかないが、これが普通であったから誰も不足を言わない。「不自由を常と思えば不足なし」とはこのことだろうか。

昭和二十年八月十五日、戦い終って敗戦の憂き目に逢い、這い上るようにして立直った日本国民をおそったものは「高度成長」と言う名の使い捨て時代である「喉もと過ぎれば……」といわれる如く物資豊富な現代は耐えに耐えた辛苦を忘れようとしているが、物を大切にする心（使用出来る間は使用する）は、戦時、平時を問わず心がけるべきことではないだろうか。

戦後三十九年経った今も、旧満州、中国から肉親を求めて戦争の忘れ形見が後を断たない。戦争の傷跡は尚深い。

キナ臭い世界状勢の中で、「戦争は止めよう！」

全世界に声を大にして叫びつつペンを置く。

これで祖国を守ったのか？

服部川支部
関本　留雄

私たちは「天皇のため、国のため、命をささげるのは男子の本懐で、大変名誉なこと」と教えられ、自分もそう思ってきました。

昭和五年、徴兵検査で甲種合格になり、翌年六月一日、朝鮮平壌七七連隊に勇んで入隊しました。九月には満州事変がおこり、支那事変、大東亜戦争となって、そのたびに召集、赤紙を受け出征しました。負傷はしましたが、幸い身体だけはもって帰ることができました。しかし、多くの戦友をなくし、中支寒山寺のある蘇州で終戦となりました。

捕虜生活を一年過ごし、上海からアメリカの船で博多に着きました。アメリカ兵の検査検疫を受け、貨物列車に乗せられ、それぞれの家路に向かいました。

大阪の我が家も、親の家も無くなり、焼け野原です。「これで祖国を守ったのか」と思いました。妻子は四国に疎開していました。三人の弟はどうしたのか。とりあえず、八尾に住んでいる兄を訪ねて、いろいろわかってきました。戦死の公報が無いので、どこかで生きていると思い、小さな家を借りておいてくれたのです。時は昭和二十一年六月、三八歳。やっと軍隊から解放され、列車の中でいただいた「持帰金証明書」とともに、二百円也で八尾での私の生活が始まりました。仕事さがし、食物さがしの毎日でした。いま住んでいる山本方面の百姓家におねがいして、南瓜やじゃがいもをわけてもらい生きてきました。

あれから三十何年、物があり余るようになり、豊かな生活になれて戦争の苦しさは忘れられようとしています。今こそ、平和憲法と民主主義を守らねばならないと思います。自民党政府に反対する政党はみとめない政党法、また徴兵制や福祉、健保の改悪に反対しましょう。最近「おしつけられた憲法だから改正するのがあたりまえ」のように言い出しているそうです。気を付けましょう。